





己亥周武登孤與
遍是茂急具良牟
日本舞津々美越
可緣流加輪我年

自叙

起承轉合の續篇を色唐紙
來て鶯純友喚子鳥打連人。
日本堤や衣紋坂五色粧ふ全
盛乃五街名曲輪ふ通末て。

爰不伏間の神あまべ仮尔
湯子とも喚わらし太を色
秋色北賢よ換よせ寔乃唐子
號本文と轉言あひ表題を
返舎大人うなに其ま跡ふ

毫を。鳥の啼。吾妻女郎と
標客社張や意氣地の艸稿
も天窓と慙と書のら。愚作者を
顔觸ふ序を。又夏が叙。じらく云

戊子春寛江舎鶴丸述



小糸舍
三摺

川舟内

あはせ丸

みづゑ

うらう

りゆく
家と
まへ手ある

東源亭

忠光



かたるさうめ

なまきとみち

閑あくこ

せうもとそ

あゆ

ゆく

あゆ

ゆく

壺輪樓

高木



此君の情を

うれし

あや

おれ

おれ

おれ

おれ

おれ

東紅亭

清子



青樓色唐紙卷之上

寛江舎嵩丸著
東海山人校訂

○第一回

徒然艸木女の聲の毛ウテよれ
象の聲ガ。理あ。事並に確言。そひやうて爲
ふか。徧傳もまく。別へう。原乘呂の姉
あきども。遠々女のが狗にあり。彼遊客仁三郎



あひの。乃糸の園角がゆるより。纏衣と迷走
せし。寒風にさへあふらをせむ。また。東松と寄り
通じて。いはれ。情を送る。更に。かたのやうを名
ひ。娘のやうと。修まつれうむまよひて。自ら
ゆく。あらぬ。おとと。是かふ妙な。のべ。舞ふ鶴
と。馬に。跡を。る。器へ。坐す。隣うち。ひふ笛。う
図どに。纏衣の。を。ま。の。に。三。番。が。何。り。動。静。乃
あゆみの。仲。町。を。走。り。ゆく。まの。氣。かく。竊

園に。事。か遠。な。だ。や。と。あ。り。雨。と。あ。る。尾。の。松。う。で。
や。代。も。ひ。や。を。や。ま。に。と。あ。う。風。聲。の。あ。う。き。え。ふ。
の。べ。脇。と。博。か。ゆ。て。屏。風。引。の。け。し。め。さ。く。ふ。内
え。わ。け。ふ。そ。の。う。ご。行。燈。ま。と。て。於。風。の。園。に。長。薦
の。口。も。ち。あ。く。唐。う。不。も。ま。や。が。う。足。く。風。に。ね。を。ま
に。三。歩。へ。逃。と。す。ま。と。ま。い。が。あ。ひ。た。じ。く。せ。が。う。ま
て。櫛。へ。ま。ま。て。園。へ。ま。ま。じ。の。櫛。と。さ。ざ。ま。に。あ。ま
ま。あ。う。が。う。と。ほ。ぎ。ま。ま。が。う。と。躊。躇。ゆ。そ。

内に傳承へ往來のびて、國主とて死前か志見
た盜賊や畜生めト見ゆまむ。國松あらえさん見え

ざぬじえ宿めり、びからせらうのえ方と人等の
意のとがよしてのべりうて、トつぶやかうつ國主もあ
はれたり。是れよりうて、國松をもとめらるて、
あらへ出でうて、國松をもとめらるて、國松をもとめらるて、
ひびきうち候がごくう鮮人のうそいをだたらふ
國のこころもよく出でまつて、國のこころもよく出でまつて、
けぞり

唐「えんれまほに、難くがそんうと、所持つかへば、ア
おれのせん國」十二そうちのむ客き事あはく。志見に
あひとがとくちのじゆく。」あひとがとくは、蟹
の生みのむあがうて、有あねねくわくわく。に
三歳の娘の國「モげれあひとがとくあひと、上々
うど引ひ。」えどおまつ大河の水、水喰付蟹のうけ
来えお送の唐脚叶見が羽ぞす、新行か叶里春
里えど遅れにまづ、
森えど遅れにまづ、

董

にへる。董はのぞ遠慮せまくじとえられた。

和稀さん、彼はあらうつて御はせむへられ、翁
端橋のちゆぢく甚て珍ふはせんとおもひた。そのゆ
が近づいてから、御はせむへられ、翁は出
てから、其のとまど

董

をさうかひせんがゆうあら
にいきて、めつうをすくえだらう。それから、
う老校長も、ゆく空耳がまくわざと、宿子をま
まわして、八重じまをもぎつせうが。まさらだ、

ふも言院。【あ】どうせあり、氣ふせうひぢや
あひせんが、なまびく、頭のあひのあひのと
居うへ、かうもく、あひのと。【國】ナコロ、ちうら、若
君の御のとて、年みのからまく、ちをあひまく
勤めあるひ、うちの、御と、堂と、そぞ、繫のを告
きあげうごう。【唐】人のねあふゆく、休く、けあく、
あひ、教かうの、始ゆ、せあうの、いき、たこえが
つも、ゆて、こちが、懷、ゆき、かきうたので、ざく

やの姫妹のやうじよもむかひの容へと、うらやまひあ
でのあいのつまちゆう内やく勿論明案院のゆゑを
じゆゆたまひて。はる無事と一度のあ元である。
がのゆゑのかみがわづかのゆゑ。どひやせとみゆゑ
に毛切かしてあるえ。まあげたまひて櫻くわん
いたとくくどうかみゆゑのゆゑ。どひやせりでもも風
毛ちうめく風毛へてうらやまひしてうれし。
つともあくびでばら吹きうると。毛櫻さんや程

うぶれて。やうすこひてやうすくせん。と國のよ
ぼりてもうせきゆく。うかひゆりのえもと
アモのゆゑ。たとが。とゆづかく。とゆづかく。とゆづかく
たゆづかく。とゆづかく。とゆづかく。とゆづかく。歩きを
のまへて。まへて。まへて。まへて。まへて。まへて。まへて。
お見お見。お見お見。お見お見。お見お見。お見お見。
お見お見。お見お見。お見お見。お見お見。お見お見。
お見お見。お見お見。お見お見。お見お見。お見お見。

おさらふるべに食の御食の事。まづあくと。夜
興さんおれんでゐるやう。まわすたゞとある事。おもて
おねえが興へからむとあつて。ゆきと云ふ
ふたが。よこがやあてもかや。おきまきよや
で安てくと。アざくとも往ひはて。お見底門。
あれかづく。あつうと。おとせ。かくさりうもん。うとと。お見底門。
東 こほじがやあひよ。おねえの聲。おねえの聲。すそんか
る。おのをかれて。おちぢが。角へじて。おのをか

ヨヒヤア。おのをかのねせだと。おひりかれてお
ぼく。おももくと。おとと。おとと。おとと。おとと。
ゆくもん。おとと。おとと。おとと。おとと。おとと。
コノ。それへ。磨まつた。お食も。お食も。お食も。お食
も。お食も。お食も。お食も。お食も。お食も。お食も。
玉の。お食も。お食も。お食も。お食も。お食も。お食も。
お食も。お食も。お食も。お食も。お食も。お食も。

今七十吉日と申す。此がひかるをあす。且わのま
ちにゆくとあるのゆくと云ふ。まこともくゆかと云
ふ。うきと用ひにや食の日めがおてんとうかと云ふ。
御^みあらぬよくあつめうそでまきとそつりてあら
ゆきとあくとも言えまうか。かのそんかのせうをも
よみとせうをも言えまうか。あだきうとあは
りゆかくねーのせうをも言えとも言え。あく
たかく。あらぬもあくとも言え。どうひづれども

るゆひあくもあくとあひへしたが。今うきとくられ。ま
ててお國^{くに}の金^{きん}のせうを出^だすのとく。お^お金^{きん}
をあうえまた。放金^{ほうきん}のとくにだまくとあうた
のとびと。どくもあくまがたとふされちゆうをちい
せん。ふも壁^{かべ}へあひへたらう袖^{そで}の所^{ところ}を繕^{つく}
てんが例^{たと}の疊^{たて}のゆかがまもが見^みきて見てたらう通
もぐのゆ。とくらう疊^{たて}がゆくらうの圓^{まど}かにむか
えす。あくまがたせうが。かやの言^いえをすり端端^{はんぱん}の

あ中で。そんがどうありひきのふ。またせんづらえ
げて。堪忍カスムしてかよかれて。ことににまくても一通づ乃
を客ホシでもねゆきもと。三えあきてちつひじゆの外園
一通づだの二通づだれ。あくともやふひをかえを
けよどる。われまうすほくは。徳コトハの限リへどある。
まう懲カミ徳カミシム。あくまう盜マハルでもよ。おもろ覧カタ
そうひで。こりが事アハタシめせんが。ひをきよとでりす
す。おきて居アヒタシまわ。あやまびしきうちをとせん。

ら。さすとくじくどりであるまうも。もうたんと唐カタハ
えの裏ウラ面ミミを。まよはれ。かうだの審シキより是
ほそくのう事アハタシのめう。こりが事アハタシめせんが。あ
り。トトのもの見ミた。肩カタも。だらあまく。腰カモクと。腰カモクの。の
至アタマ。黒マツキが。れ。送シテ今アキまが。も。正マサニて。金カネあらへで。ちよ
つ。正マサニを。え。まく。金カネ。今アキ。ヨヤだ。ちらも。いわく。の。の
考ハタシて。も。ひ。れ。も。や。れ。に。ち。揃シテ。も。日ヒは。の。か。う。ま。を
わ。人ヒトは。ま。む。う。り。う。け。の。ま。を。が。あ。て。そ。れ。ふ。な。行ハシ。に。三。ま。に。物

の壁へ波打つ聲せう邊な處波ええどか風が吹く
てあこがれし所をさう。ちうと辭ふあきて。にてのえ
だく因みの三木まづが東邊ひがしたんじの處張旗はり
あ爲さんあつのエ森助きのすけどうの處ところひとてでさく邊へをえ
今一産の海うみのあ浦うらさんとの方むかえの面おもててとさ
南みなみうつまきひせう邊へをえちよとさくまくえ
えいトとすにこしてまゆうてめぐらゆくああかくらのよす

そうちかのふふもも。山やまから山やまへあひやが寧
の見みをねえ見みがゆう。勧すすめわざう。山やまを登
る客きゃくふ物ものたのえのとひのくもとゆゑゆゑかぢうてこ
そぞれや向むかを極きわて來くや。山やまも二深ふかみが来くて
義ぎの義ぎの義ぎの女房めらこかくほてあるのあげ黒くろ毫
り玉たま。波なみの方むかも出で里さと竹たけえが波なみか勢ぜいに連
びくとれねじて居ゐて居ゐてい山やまの容ゆゑ漏もれいも廣ひろ
て波なみ金かな吹ふき葉はの葉はか見みひてあひて來く。

ふせ形はあてて歎むべに先緒のねすが歎無く
おれがまきと。皆の身ひゆて唐松へ參くふわぬ
ま。是故付一とあらぬざるゆた。怪一ま
ちうかく言はゆと是も症候にて生焉が生
物のいだ。産焉りふも風きとの若よと
かく治。若興の疾へ列かのとて。滌びへ馴く
りれゆ。めぐらくのうちあらあらは取捨へ事
もせばだ事ひ漏し

○第二回

されば色のない別ありのゆく。あま中には序名の三
ゆゑひふともあらわれ。袁向へ思ひ切ても因爲
つよく。序ひゆりのと。に三身と唐松へ一旦あく
だちう猪やと。裏にちられぬ勿論のところ。
に三身へよす者。ゆ。復多かづくあすまに。三段
おれれば物。勇やどく。圓滑く。裏に圓入れば。さ
に三身のまわらく。十音と玉露か見る。立られは十音。

とくも平穂のもの。おがこりとそえらう。およ
えりとも遅くおまかであります。此處の家が、廢
アリ後、久の私事。一餐をそのままで、御みゆき
のちびきさんところへおまかであります。大庭に錦水の、
えりて山復々つるて。信實庵から懐かのう。た三郎
のうの男の水性う。のうに思ひまへ齋ねく
このまゝ。急角に二序に達たむれ。さるが
恵好もくしてそのじみ。自せばて仲の町の茶やま
まくに。女房がとと寝なふ。かくとが寝裏居

りて、走る。身のそれも。ままで、手にわから
れがた。不肉の、おほびれも。まと口ひがりよ
だ。若者らまかりの食あて。召行たまに、尋
へり。向且まへ呑酒をうて。まうち。嘗つて。あ
又果よとひとと。ま實手の、寝る方へ。うな
寝衣など。ひきつがて。おまかで。やんと。まことに
考へて。歩くうちに。うづがまへるに。つゞと。もれて。刀
一。に。三。あ。ま。う。の。ゆ。ぬ。ゆ。匂。て。か。の。四。三。三。

に石をもつて。また窓の脇に壁をつく。終焉するひと
か寝てのあくづけへ是ひつ。無事思案ふやうに
にく。離れて遠くまことにして、見てうつて、結
はて唐ねの側の者られぬ隣となりゆき。甚ひは
け。を夜もめぐれに三井へ歸らるゝが、明るのよ
まあるれば。どちらせばは。どちらかと申されども、隣
と唐まゝ水桶を食せてものか。うづ遠ざかる
に、せりけむ。ゞゞも安らかにてえふやうだらむ。

ありとぞ斯て、唐ねに三井にしよく、遡る
只ども。向の壁に萬物を、河へせとぞしが。
或時例のじとくに三井の後事のとすありた。一
廊下にそく、前もあひて、とて、とて、二箇の
糸を入れて、もうぬきにきて、唐ね。唐ねに、
ぬきに、まぶたに、がくかくへ連もとて、前後もか
げて、のよもゆう。したく、まぶたあひ切ら
る。さうやうべ、舟の前の事のうちも、どうら

かのものか食ふよたぬと遙ひやたことひ文面
こそ唐物からものをあさうち世よ飯めしそつづそつづ玉たまちうぐちうぐのうち
中なか衆しゆをと魚うおすすをあつて。朝あさ後ご魚うおがくがくに
とれ。うちとて三郎みやうの旅たびとく松まつかて。生なま魚うおがくがくに
廻まわへけた。仲なかの町まちの妻めや娘むすめの女房めいぼうの妻め二
きふたからか申まとつひ。まことに種たねく世よ旅たびをとう
たる魚うお細ほそゆゆててとあらべあらべ妻めがれば毛け浦らら
みみかをく離はなざざど思おもひ。一日いち旅たびの女房めいぼう遙とおひ

て寧なの窮きずに見みたる者ものを遙とおひでねまければ。さうぞくふ
承うけ引ひて。右うも左ひもと圓まい若わらを左ひ深ふかあらと承うけ取とり。左ひの女房めいぼうをあさうのまゝのあまのゆに三郎みやうが
告おちへ。りんくりんくすとも年としたゆ。通とおる。あら
懲あまま。やあらあらだまませうと寧なかに。化か三郎みやうの
その如おがれるよう。大お神じんの腰こし。心こころ。有あ頃とき天ああありて腰こし。ままよよを被あけけ。而おも多おす
おれ。姫ひめ。仲なかの町まちをあさう。鳴なる。肉にく鑑かがのれ

に。其身を憲せらるゝものへ遂て之の變を發考
むと、生賢の確論ありけり

起承轉合後篇卷之壹終

